

国内の畜産物の需給動向

牛肉

8年4月の牛肉生産量、前年同月並み

生産量

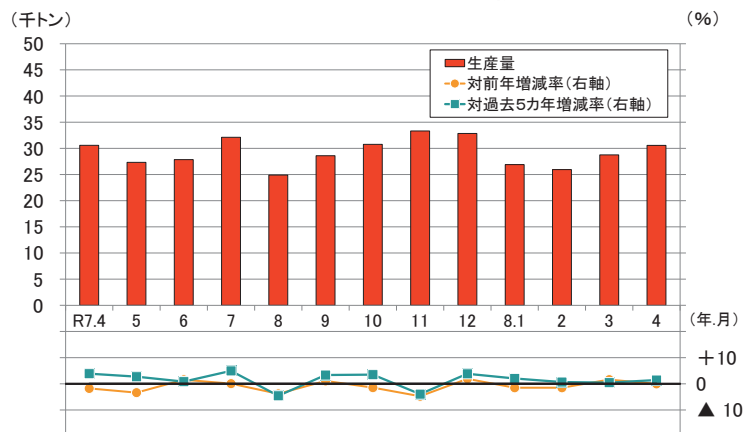
令和8年4月の牛肉生産量^(注1)は、3万570トン（前年同月比0.0%減）と前年同月並みとなった（図1）。品種別では、和牛は1万6285トン（同1.3%増）、交雑種は8367トン（同1.0%増）と、いずれも前年

同月をわずかに上回った一方、乳用種は5878トン（同4.9%減）と前年同月をやや下回った。

なお、過去5カ年の4月の平均生産量との比較では、1.4%増とわずかに上回る結果となった。

（注1）生産量の合計は、その他の牛、子牛を含む。

図1 牛肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

輸入量

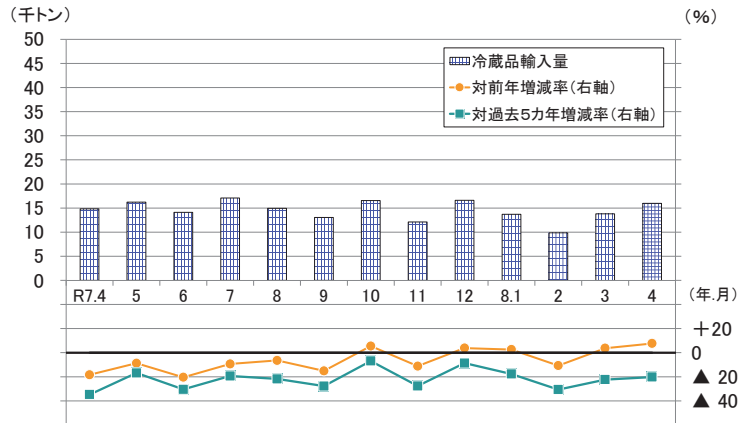
4月の輸入量について、冷蔵品では、現地価格の高止まりなどにより主要輸入先である米国産の輸入量が減少した一方、豪州産の輸入量が増加したことなどから、1万5979トン（前年同月比7.7%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図2）。冷凍品では、引き続き米国産ショートプレート（バラ）や豪州産のうち主に加工用のひき材などに使用

されるトリミングの輸入量が増加したことなどから、3万9350トン（同2.9%増）と前年同月をわずかに上回った（図3）。この結果、輸入量の合計^(注2)でも、5万5398トン（同4.4%増）と前年同月をやや上回った。

なお、過去5カ年の4月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は20.2%減と大幅に、冷凍品は2.0%減とわずかに、いずれも下回る結果となった。

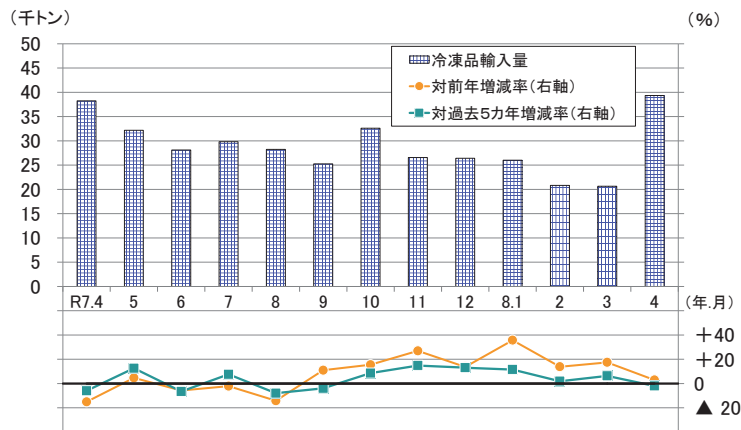
（注2）輸入量の合計は、煮沸肉、ほほ肉、頭肉を含む。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

家計消費量等

4月の牛肉の家計消費量（全国1人当たり）^(注3)は、145グラム（前年同月比5.0%減）と前年同月をやや下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の4月の平均消費量との比較では、13.3%減とかなり大きく下回る結果となった。

4月の外食産業全体の売上高は、上中旬を中心に客数が伸び悩むところもあったが、春休みや大型連休に合わせた各種キャンペーンが好評だったことや、全国的に天候が安定し、気温が上昇したことにより、前年同月比

8.0%増と前年同月をかなりの程度上回った。物価高による節約志向で客数の伸び悩みが懸念される中で、ファストフードなどの低価格業態の好調が続き、期間限定商品の投入や各種キャンペーンの実施、CMの強化などで健闘している（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」）。

このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態として、ハンバーガー店を含むファストフードの洋風は、春休みに合わせた割安なメニューによる集客増や新商品の投入などが奏功したことから、同8.4%増と前年同月をかなりの程度上回った。また、牛丼店を含むファストフードの和風は、新メニューや人気メニュー

の好調などから、同21.5%増と前年同月を大幅に上回った。ファミリーレストランの焼き肉は、春休み需要が堅調に推移し、予約サイトの来店直前予約サービスの活用も奏功したことから、同8.7%増と前年同月をかなりの程度上回った。

(注3) 1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

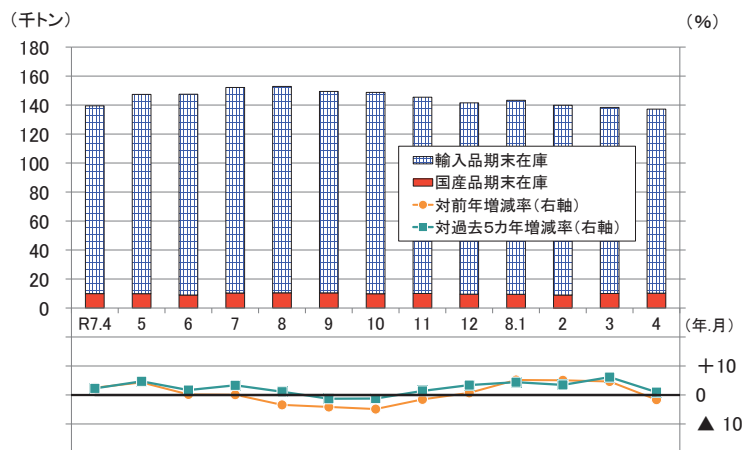
推定期末在庫・推定出回り量

4月の推定期末在庫は、13万7200トン(前年同月比1.6%減)と前年同月をわずかに

に下回った(図4)。このうち、国産品は1万206トン(同2.8%増)と前年同月をわずかに上回った一方、在庫の大半を占める輸入品は12万6994トン(同2.0%減)と前年同月をわずかに下回った。

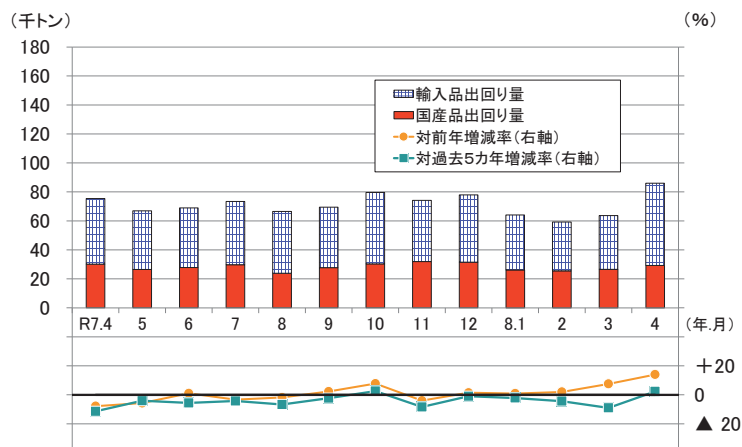
推定出回り量は、8万6016トン(同14.0%増)と前年同月をかなり大きく上回った(図5)。このうち、国産品は2万9292トン(同3.0%減)と前年同月をやや下回った一方、輸入品は5万6724トン(同25.4%増)と前年同月を大幅に上回った。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部)

豚 肉

8年4月の豚肉生産量、前年同月比0.6%減

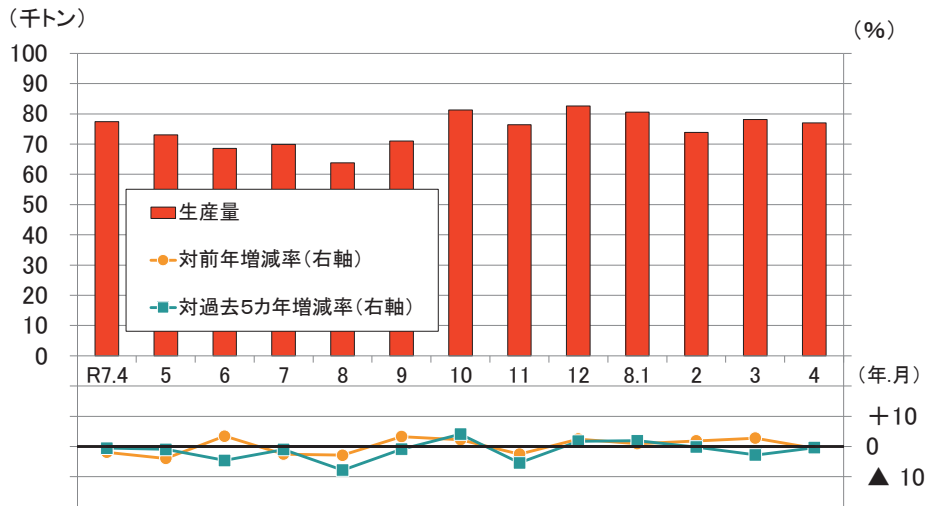
生産量

令和8年4月の豚肉生産量は、7万7021トン（前年同月比0.6%減）と前年同月を

わずかに下回った（図1）。

なお、過去5カ年の4月の平均生産量との比較でも、0.4%減とわずかに下回る結果となった。

図1 豚肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

輸入量

4月の輸入量について、冷蔵品は、主要輸入先国である米国産およびメキシコ産が増加し、3万6429トン（前年同月比1.6%増）と前年同月をわずかに上回った（図2）。冷凍品は、アフリカ豚熱発生による輸入一時停止措置^(注1)の影響でスペイン産が減少した一方、代替として米国産、ブラジル産の他、オランダ産、デンマーク産、チリ産なども増加したことなどから、6万6827トン（同15.1%増）と前年同月をかなり大きく上回った（図3）。この結果、輸入量の合計^(注2)でも、

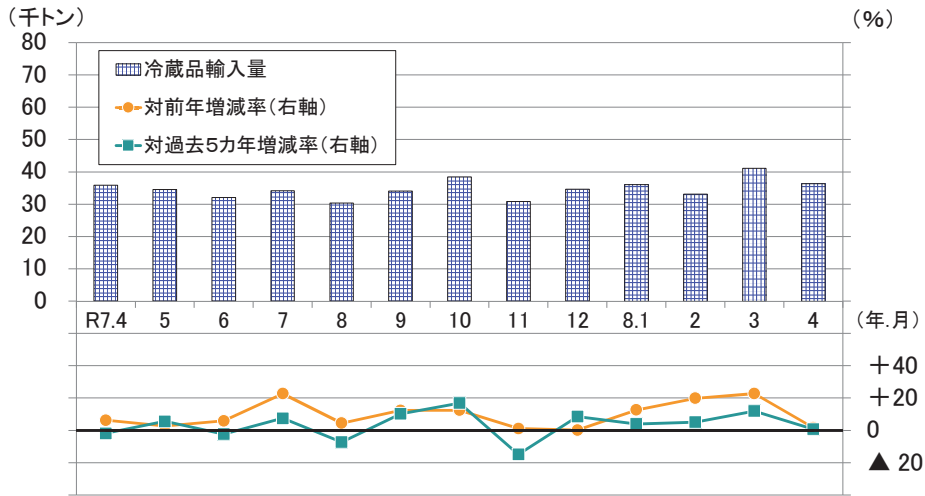
10万3288トン（同10.0%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

なお、過去5カ年の4月の平均輸入量との比較でも、冷蔵品は0.8%増、冷凍品は1.6%増と、ともにわずかに上回る結果となった。

(注1) 農林水産省は、令和7年11月28日にスペイン産豚肉等の輸入を一時停止。その後、同年10月29日以前にと殺・加工・梱包まで終了しているものであり、かつ輸出されるまでの間、防疫上安全かつ衛生的に保管および輸送されたものであることをスペイン政府が証明しているものについては、輸入停止措置の対象外とすることを発表。

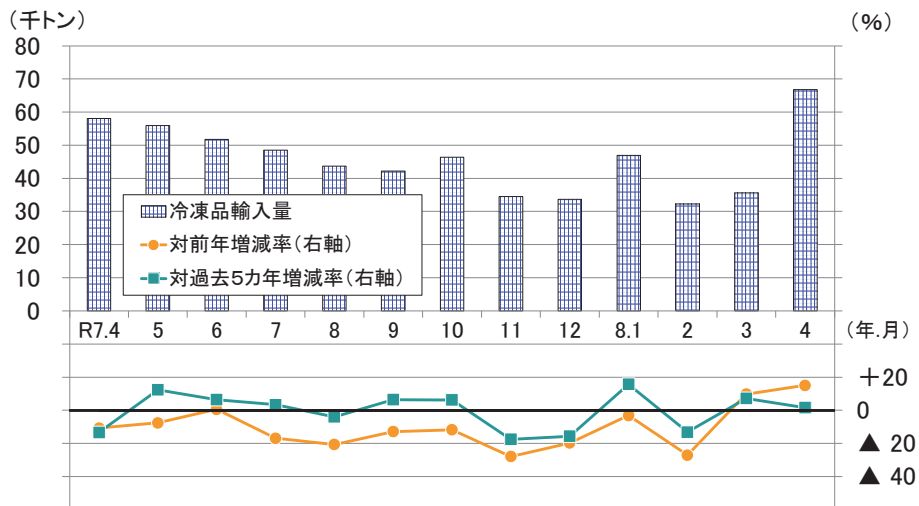
(注2) 輸入量の合計は、くず肉を含む。

図2 冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

家計消費量

4月の豚肉の家計消費量（全国1人当たり）^(注3)は、663グラム（前年同月比3.6%増）と前年同月をやや上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の4月の平均消費量との比較でも、4.0%増とやや上回る結果となった。

（注3）1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

推定期末在庫・推定出回り量

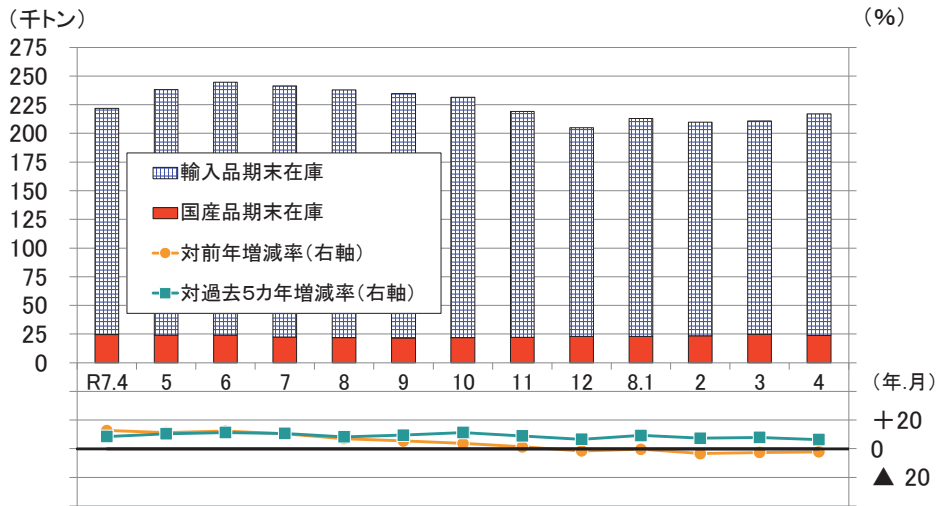
4月の推定期末在庫は、21万6997トン（前年同月比2.2%減）と前年同月をわずかに下回った（図4）。このうち、国産品は2万3825トン（同2.8%減）、在庫の大半を占める輸入品は19万3172トン（同2.1%減）と、ともに前年同月をわずかに下回った。

推定出回り量は、17万4071トン（同4.8%増）と前年同月をやや上回った（図5）。

このうち、国産品は7万7942トン（同0.9%増）とわずかに、輸入品は9万6129

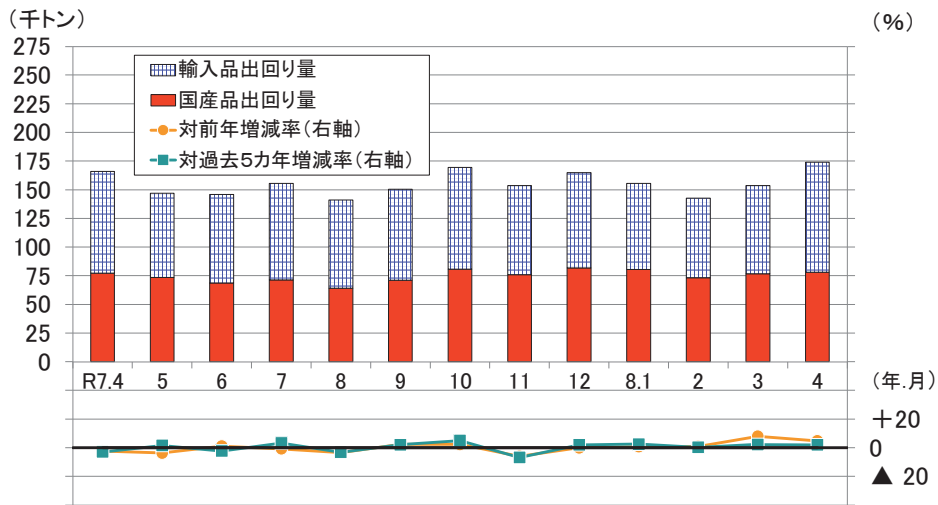
トン（同8.3%増）とかなりの程度、いずれも前年同月を上回る結果となった。

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部)

鶏肉

8年4月の鶏肉生産量、前年同月比0.2%増

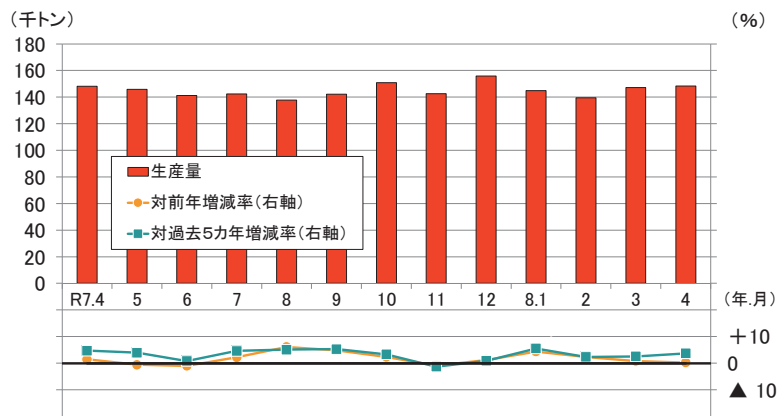
生産量

令和8年4月の鶏肉生産量は、14万8412トン（前年同月比0.2%増）と前年同月並み

となった（図1）。

なお、過去5カ年の4月の平均生産量との比較でも、3.8%増とやや上回る結果となった。

図1 鶏肉生産量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ
注1：骨付き肉ベース。
注2：成鶏肉を含む。

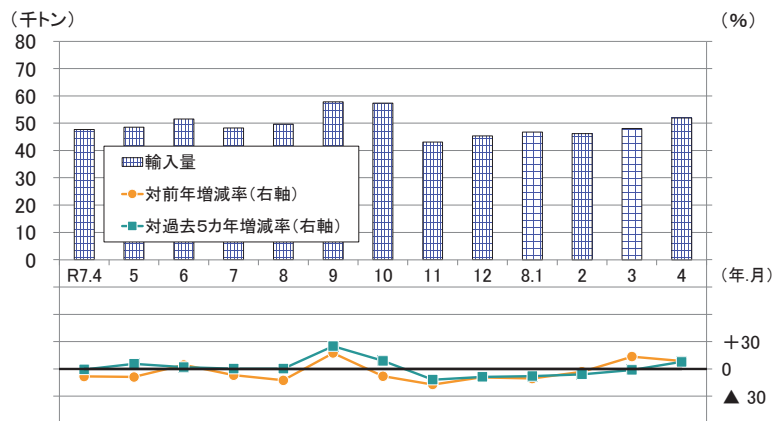
輸入量

4月の輸入量は、主要輸入先のうちブラジル産が前年同月と比較して大幅に増加したことや輸入品在庫量が低水準であることなどを

受けて、5万1934トン（前年同月比8.8%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図2）。

なお、過去5カ年の4月の平均輸入量との比較でも、7.8%増とかなりの程度上回る結果となった。

図2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

家計消費量

4月の鶏肉の家計消費量（全国1人当たり）^(注)は、541グラム（前年同月比0.6%増）と前年同月をわずかに上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の4月の平均消費量との比較でも、2.0%増とわずかに上回る結果となった。

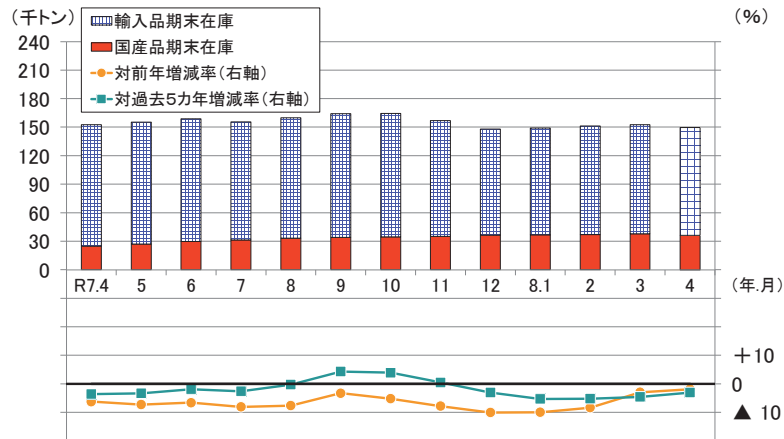
(注) 1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

推定期末在庫・推定出回り量

4月の推定期末在庫は、14万9596トン（前年同月比1.8%減）と前年同月をわずかに下回った（図3）。このうち、輸入品は11万3247トン（同11.1%減）と前年同月をかなり大きく下回った。

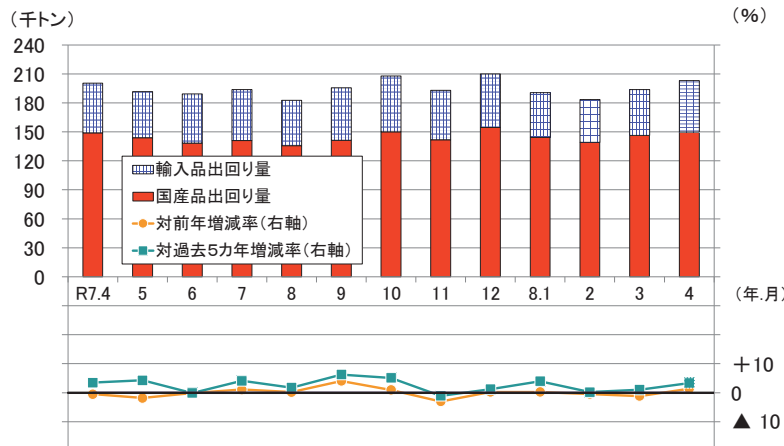
推定出回り量は、20万3216トン（同1.4%増）と前年同月をわずかに上回った（図4）。このうち、国産品は14万9892トン（同0.7%増）と前年同月をわずかに上回った一方、輸入品は5万3324トン（同3.5%増）と前年同月をやや上回った。

図3 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図4 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部)

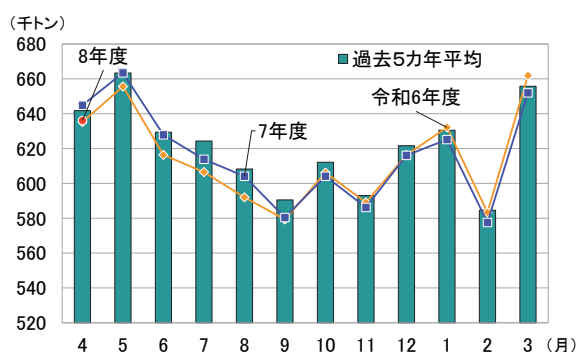
牛乳・乳製品

8年4月の生乳生産量は前年同月を1.4%下回る

全国の4月の生乳生産量、前年同月を7カ月連続で下回る

令和8年4月の生乳生産量は、主に経産牛頭数の減少により63万6092トン（前年同月比1.4%減）と、7カ月連続で前年同月を下回った（図1）。地域別では、北海道が36万2680トン（同0.9%減）と4カ月連続、都府県が27万3412トン（同2.0%減）と8カ月連続で、それぞれ前年同月を下回り、この傾向は令和8年前半まで続く見通されている。

図1 生乳生産量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

4月の生乳処理量を用途別に見ると、牛乳等向けは30万5732トン（同1.9%減）と、9カ月連続で前年同月を下回った。このうち、業務用向けについては、缶コーヒーの値上げなどにより、2万2465トン（同10.9%減）と需要の落ち込みが見られた。

乳製品向けは、32万6821トン（同0.9%減）と2カ月連続で前年同月を下回った。これを品目別に見ると、クリーム向けは5万7272トン（同2.3%減）と6カ月連続、脱脂粉乳・バター等向けは18万526トン（同2.1%減）と、2カ月

連続で、それぞれ前年同月を下回った（農畜産業振興機構調べ「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。一方で、チーズ向けは4万3160トン（同3.8%増）と8カ月連続で上回った。

全国の4月の牛乳生産量、前年同月を9カ月連続で下回る

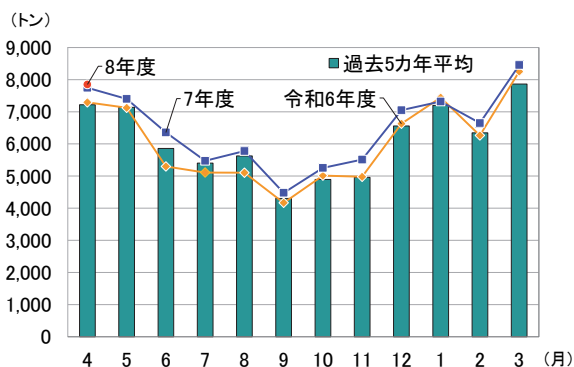
4月の牛乳等生産量を見ると、飲用牛乳等のうち牛乳は、24万5159キロリットル（前年同月比1.9%減）と9カ月連続で前年同月を下回った。成分調整牛乳も値上げの影響による前年割れが継続しており、1万4964キロリットル（同11.3%減）となった。また、加工乳についても、1万1176キロリットル（同2.0%減）と9カ月連続で前年同月を下回った。

はっ酵乳については大容量タイプが堅調に推移しているものの、8万9324キロリットル（同0.6%減）となった。

4月末のバター在庫量、前年同月比22.3%増

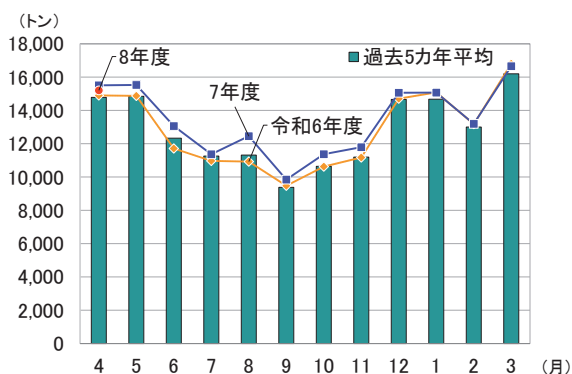
4月のバターの生産量は脱脂粉乳・バター等向けは前年割れしているものの、乳成分のうち脂肪分の割合が増加していることもあり、7851トン（前年同月比1.4%増）と3カ月連続で前年同月を上回った（図2）。在庫量は、20カ月連続で前年同月を上回り、4月末は3万6077トン（同22.3%増）となった（図3）。推定出回り量は、6519トン（同1.1%減）と3カ月連続で前年同月を下回った（農畜産業振興機構調べ）。

図2 バターの生産量の推移



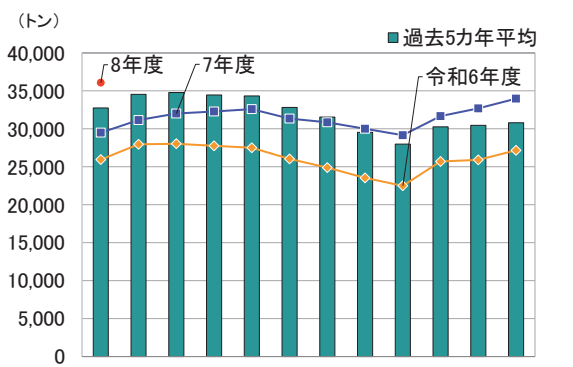
資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図4 脱脂粉乳の生産量の推移



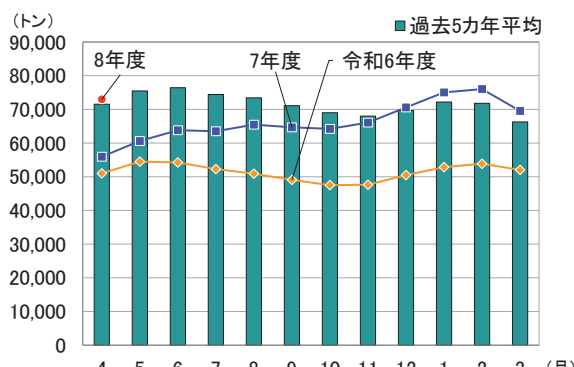
資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図3 バターの在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図5 脱脂粉乳の在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

4月末の脱脂粉乳在庫量、前年同月比30.4%増

4月の脱脂粉乳の生産量は、脱脂粉乳・バター等向けが前年割れしていることに加え、乳成分のうち無脂肪固形分の割合が減少していることなどから、1万5203トン（前年同月比1.9%減）と2カ月連続で前年同月を下回った（図4）。在庫量は、17カ月連続で前年同月を上回り、4月末は7万2989トン（同30.4%増）となった（図5）。推定出回り量は、1万1764トン（同1.6%増）と3カ月連続で前年同月を上回った（農畜産業振興機構調べ）。

Jミルク、令和8年度の生乳生産量を前年度比1.2%減と見込む

一般社団法人Jミルクは令和8年6月5日、「2026年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと課題について」を公表した。これによると、令和8年度の生乳生産量は、前半の経産牛頭数の減少などにより、731万0000トン（前年度比1.2%減）と3年ぶりに前年度を下回る見通しとなった。地域別に見ると、北海道は427万7000トン（同0.6%減）と3年ぶりの減少、都府県は303万3000トン（同1.9%減）と5年連続での減少と見込んでいる。（表）。

表 生乳生産量の見通し

(単位：千トン、%)

年度	全国		北海道		都府県	
	生産量	前年度比 (増減率)	生産量	前年度比 (増減率)	生産量	前年度比 (増減率)
令和5年度	7,324	▲2.8	4,175	▲1.9	3,149	▲4.0
6年度	7,374	0.7	4,264	2.1	3,110	▲1.3
7年度	7,396	0.3	4,303	0.9	3,093	▲0.6
8年度 (見通し)	7,310	▲1.2	4,277	▲0.6	3,033	▲1.9

資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、一般社団法人Jミルク「2026年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと課題について」(6月5日公表)

注：令和5～7年度は実績値、8年度は見通しである。

牛乳類の生産量については、428万8000キロリットル(前年度比1.5%減)と、前年度を下回る見通しとなった。内訳を見ると、牛乳は値上げから一巡することもあり、300万8000キロリットル(同0.9%減)となる一方、値上げで価格メリットが薄まったこともあり、加工乳は13万9000キロリットル(同1.9%減)、成分調整牛乳は17万9000キロリットル(同9.2%減)、乳飲料は96万1000キロリットル(同1.7%減)と見込んでいる。他方、はっ酵乳は、比較的堅調に推移することにより、104万9000キロリットル(同0.3%増)と見込んでいる。

乳製品向け処理量は、生乳生産の減少見込

みに伴い、348万3000トン(同1.0%減)と前年度を下回る見通しとなった。品目別に見ると、脱脂粉乳・バター等向けは182万5000トン(同2.2%減)と減少を見込む一方、チーズ向けは43万7000トン(同0.3%増)、生クリーム等向けは122万1000トン(同0.4%増)と増加を見込んでいる。

脱脂粉乳の期末在庫量は、1万3000トンの在庫対策をした場合は8万3300トン(同19.8%増)と見込んでいる。一方、バターについては、期末在庫量は3万6200トン(同6.6%増)と見込んでいる。

(酪農乳業部)

鶏卵

8年5月の鶏卵卸売価格、前年同月比7.4%安

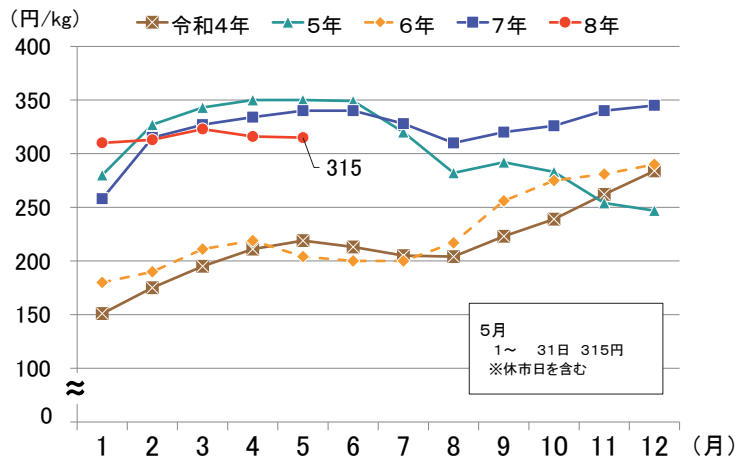
卸売価格

令和8年5月の鶏卵卸売価格（東京、Mサイズ基準値）は、1キログラム当たり315円（前年同月差25円安、前年同月比7.4%安）と、前年同月の同価格をかなりの程度下回った（図）。同価格の日ごとの推移を見ると、1カ月を通して同315円となった。なお、過去5カ年の5月の平均卸売価格は274円で

あり、それと比較すると、15.0%高とかなり大きく上回る結果となった。

供給面について、生産量は4月にも国内で高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）の発生はあったものの、比較的安定していた。需要面について、業務筋では大型連休による大きな影響は見受けられず、外食筋では花見などの行楽需要や歓送迎会シーズンの一服感により、全体として落ち着いた状況となった。

図 鶏卵卸売価格（東京、Mサイズ基準値）の推移



資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」

注：消費税を含まない。

家計消費量

4月の鶏卵の家計消費量（全国1人当たり）^(注)は、873グラム（前年同月比3.6%減）と前年同月をやや下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の4月の平均消費量との比較でも、3.5%減とやや下回る結果となった。

（注）1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

（畜産振興部）

令和7年度食肉流通統計・令和7年食鳥流通統計調査結果

農林水産省が公表している畜産物流通調査のうち、本稿では、「食肉流通統計」（令和7年4月～8年3月）^(注1)より成牛（和牛、交雑牛、乳牛）および豚のと畜頭数、主要市場^(注2)における卸売価格および取引頭数について、また、「令和7年食鳥流通統計調査結果」（令和7年1～12月）^(注3)より食鳥の処理羽数および重量について報告する。

(注1) 令和7年4月～8年3月の月別データ（速報値）を機構にて集計。

(注2) 中央卸売市場および地方卸売市場を指す。「中央卸売市場」は、卸売市場法（昭和46年法律第35号）の規定により開設されている仙台、さいたま、東京、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸、広島および福岡の10市場。「地方卸売市場」は、卸売市場法の規定により開設されている地方卸売市場のうち、畜産経営の安定に関する法律（昭和36年法律第183号）第3条第1項の標準的販売価格の算出に用いられる市場を言い、茨城、栃木、群馬、川口、山梨、岐阜、浜松、東三河、四日市、姫路、加古川、西宮、岡山、坂出および佐世保の15市場。

(注3) 速報値。

【牛肉】

成牛のと畜頭数、乳牛の減少により6年ぶりの減少

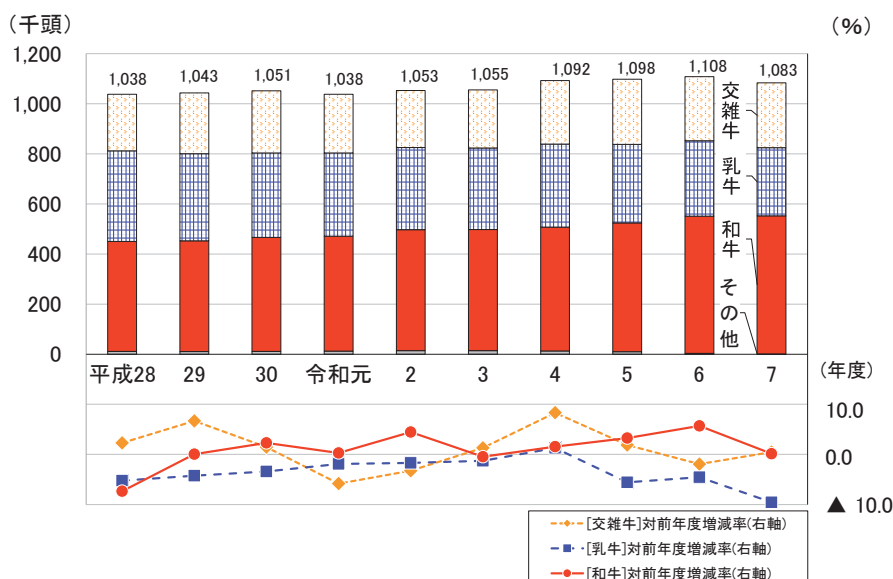
令和7年度の成牛のと畜頭数は、108万3352頭（前年度比2.2%減）と、前年度をわずかに下回り、6年ぶりの減少となった（図1）。

品種別に見ると、和牛は、55万1664頭（同0.7%増）と前年度をわずかに上回り、9年連続の増加となった。交雑牛は、25万8831頭（同1.1%増）と前年度をわずかに上回った。

一方、乳牛は、27万1958頭（同9.5%減）と前年度をかなりの程度下回り、3年連続の減少となった。

なお、と畜頭数全体に占める各品種の割合は、和牛が50.9%、交雑牛が23.9%、乳牛が25.1%となり、平成2年以降、初めて和牛の占める割合が5割を超える結果となった。

図1 成牛の年度別と畜頭数の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」

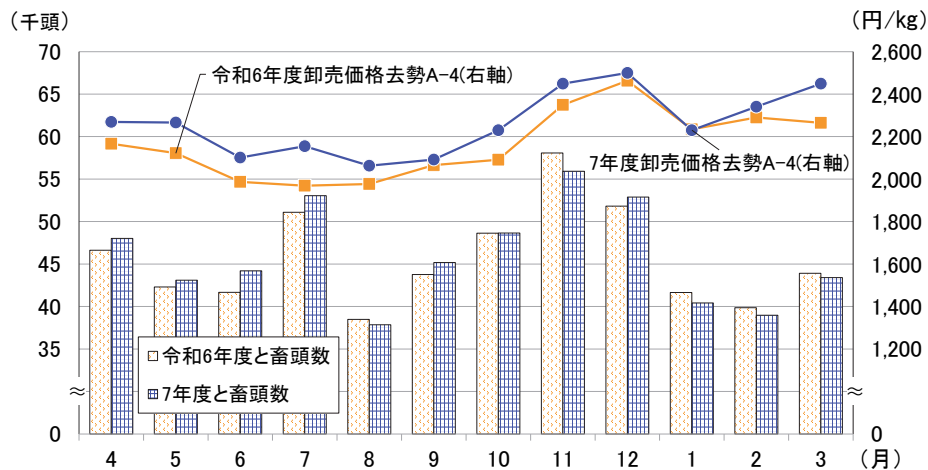
和牛の卸売価格、おおむね前年度を上回る

令和7年度の和牛のと畜頭数を月別に見ると、最も多かったのが、11月の5万5915頭（前年同月比3.7%減）、次いで7月の5万3038頭（同3.8%増）、12月の5万2890頭（同2.1%増）の順となった（図2）。和牛のと畜頭数は、例年、最需要期の年末に

向けてピークを迎えるほか、春のお祝い需要、お盆などの時期に増加する傾向があるが、7年度も同様の傾向が見られた。

月別の卸売価格（東京、去勢A-4）を見ると、8年1月を除き、前年同月を上回って推移した。なお、最も高かったのが12月の1キログラム当たり2500円（同1.5%高）、最も安かったのが8月の同2063円（同4.4%高）となった。

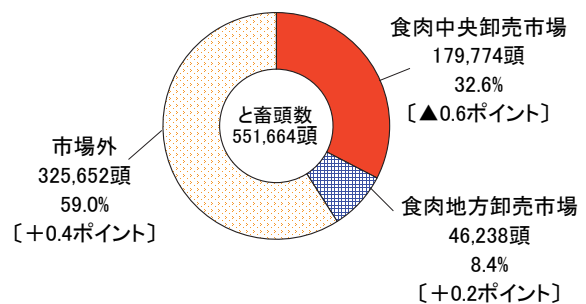
図2 和牛の月別と畜頭数および卸売価格の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」、東京食肉市場（株）
注：消費税を含む。

和牛の主要市場における市場経由率^(注4)を見ると、食肉中央卸売市場が32.6%（17万9774頭）と前年度より0.6ポイント低下し、食肉地方卸売市場は8.4%（4万6238頭）と前年度より0.2ポイント上昇した（図3）。この結果、市場全体では41.0%（22万6012頭）と前年度より0.4ポイント低下した。

図3 令和7年度 和牛の市場経由率



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：〔 〕は対前年度とのポイントの差。

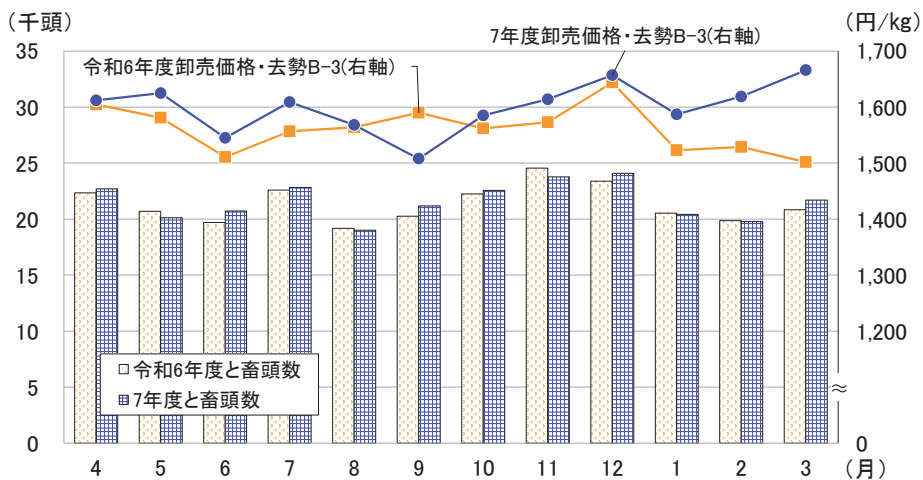
(注4) 卸売市場における取引成立頭数が、全と畜頭数に対して占める割合。なお、取引成立頭数は、卸売市場への上場頭数のうち、卸売業者と売買参加者との間に取引が成立した頭数。

交雑牛の卸売価格、年度末に上昇

令和7年度の交雑牛のと畜頭数を月別に見ると、最も多かったのが、12月の2万4086頭（前年同月比3.0%増）、次いで11月の2万3763頭（同3.2%減）、7月の2万2822頭（同1.0%増）の順となった（図4）。

月別の卸売価格（東京、去勢B-3）を見ると、7年9月は前年同月割れとなったものの、年度を通じて1500円台を超える状況が続いた。なお、最も高かったのが8年3月の1キログラム当たり1666円（同10.9%高）、最も安かったのが7年9月の1508円（同5.2%安）となった。

図4 交雑牛の月別と畜頭数および卸売価格の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」、東京食肉市場（株）
注：消費税を含む。

交雑牛の主要市場における市場経由率を見ると、食肉中央卸売市場は25.2%（6万5173頭）と前年度より0.9ポイント減少し、食肉地方卸売市場も13.6%（3万5098頭）と同じく0.8ポイント減少した（図5）。この

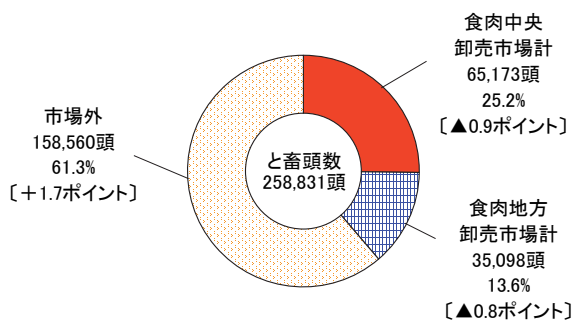
結果、全体では38.7%（10万271頭）と前年度より1.7ポイント低下した。

乳牛のと畜頭数は減少、卸売価格は上昇が続く

令和7年度の乳牛のと畜頭数を月別に見ると、最も多かったのが、10月の2万5158頭（前年同月比11.9%減）で、次いで4月の2万4105頭（同10.3%減）、9月の2万3709頭（同8.8%減）の順となり、すべての月で前年同月を下回った（図6）。

月別の卸売価格（東京、去勢B-2）を見ると、7年12月は前年同月を割ったものの、前年から高水準で推移し、1100円台を超える状況が続いた。なお、最も高かったのが

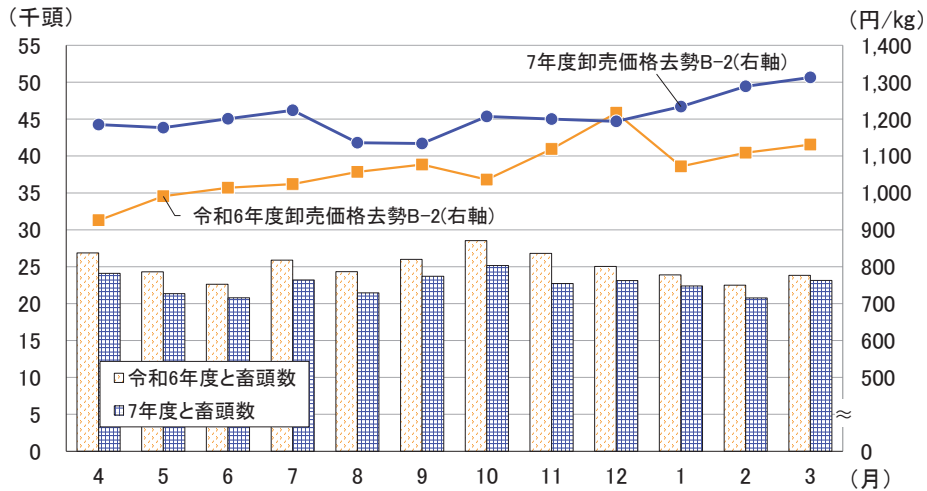
図5 令和7年度 交雑牛の市場経由率



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：〔 〕は対前年度とのポイントの差。

8年3月の1キログラム当たり1313円（同1134円（同5.3%高）となった。16.1%高）、最も安かったのが7年9月の同

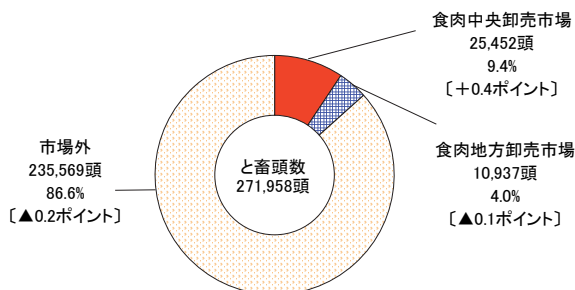
図6 乳牛の月別と畜頭数および卸売価格の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」、東京食肉市場株式会社
注：消費税を含む。

乳牛の主要市場における市場経由率を見ると、食肉中央卸売市場は9.4%（2万5452頭）と前年度より0.4ポイント増加し、食肉地方卸売市場は4.0%（1万937頭）と前年度より0.1ポイント減少した（図7）。この結果、全体では13.4%（3万6389頭）と前年度より0.2ポイント上昇した。

図7 令和7年度 乳牛の市場経由率



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：〔 〕は対前年度とのポイントの差。

【豚肉】

豚のと畜頭数、前年度並みのものの微減

令和7年度の豚のと畜頭数は、1612万3731頭（前年度比0.2%減）と前年度並みとなった（図8）。

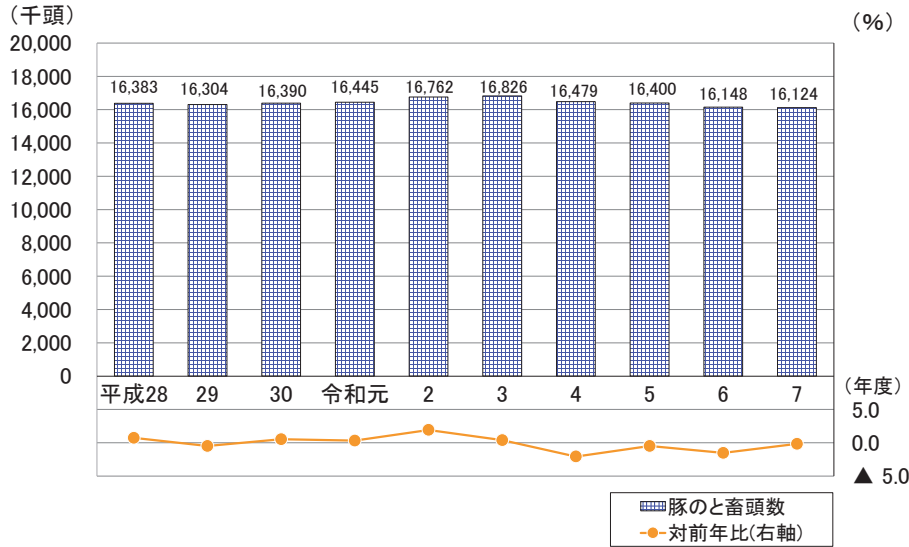
7年度の豚のと畜頭数を月別に見ると、最も多かったのが、12月の149万820頭（前年同月比1.8%増）、次いで10月の147万7873頭（同1.5%増）、8年1月の141万448頭（同0.5%増）の順となった（図9）。

月別の卸売価格（東京、上）を見ると、6月、7月、11月および8年3月を除き、前年同月を下回った。なお、最も高かったのが、7月の1キログラム当たり867円（同4.3%高）と前年度に続き800円を超過し、最も安かったのが、10月の同557円（同10.0%安）と前年度の最安値である571円（6年11月）を下回った。

豚の主要市場における市場経由率を見ると、食肉中央卸売市場は5.7%（92万1572頭）と前年度より0.2ポイント上昇し、食肉地方卸売市場は6.6%（106万2063頭）と

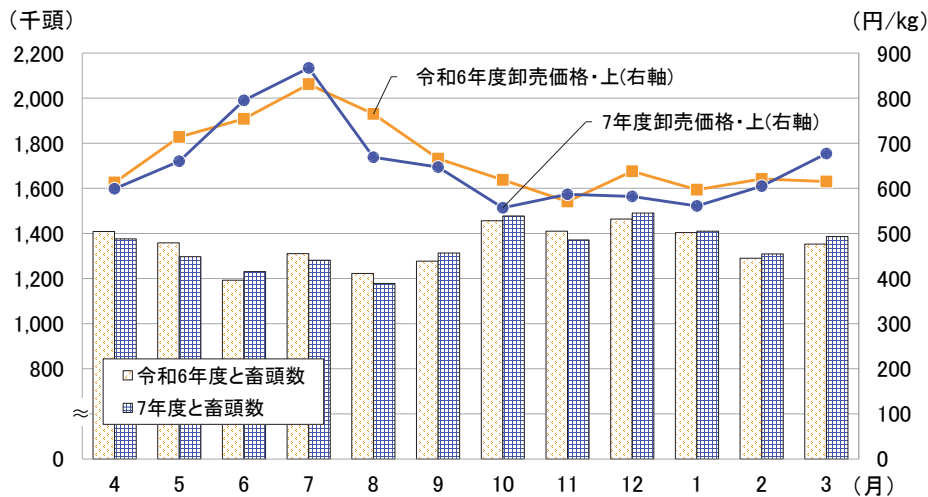
前年度より0.2ポイント低下した（図10）。この結果、市場全体でも12.3%（198万3635頭）と前年度並みとなった。

図8 豚の年度別と畜頭数の推移



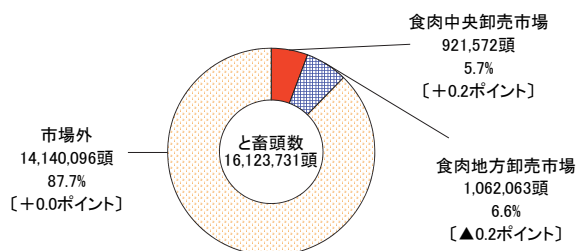
資料：農林水産省「食肉流通統計」

図9 豚の月別と畜頭数および卸売価格の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」、東京食肉市場株式会社
注：消費税を含む。

図10 令和7年度 豚の市場経由率



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：[] は対前年度とのポイントの差。

【鶏肉】

肉用若鶏の処理重量、増加傾向で推移

令和7年（1～12月）の食鳥処理羽数^(注5)は、8億2792万3000羽（前年比0.0%減）と前年並みとなった。また、食鳥処理重量^(注6)も、241万9955トン（同0.3%増）と前年並みとなった。

種類別に見ると、全体の約9割を占める「肉用若鶏（ふ化後3カ月齢未満）」は、処理羽数

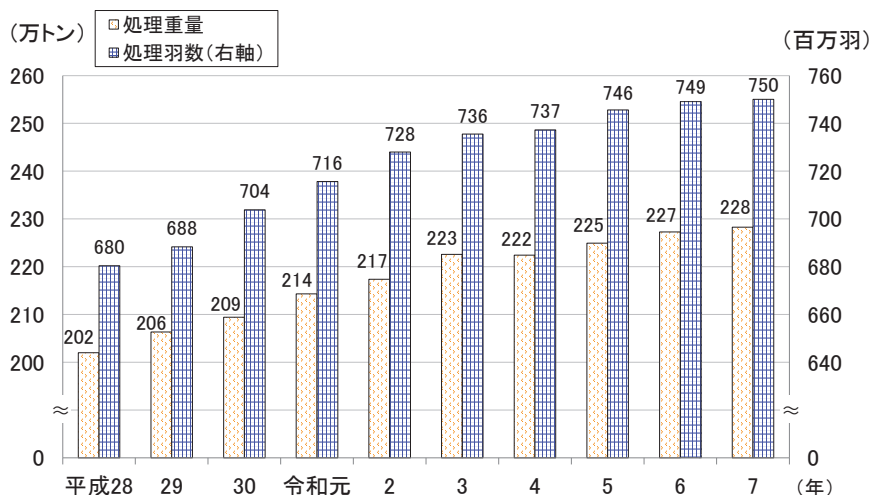
が7億5006万8000羽（同0.1%増）と前年並み、処理重量が228万2523トン（同0.4%増）と前年をわずかに上回った（図11）。

全体の1割を占める「廃鶏（採卵鶏または種鶏を廃用した鶏）」は、処理羽数が7666万8000羽（同1.4%減）、処理重量が13万3968トン（同2.7%減）と、いずれも前年をわずかに下回った（図12）。

その他の地鶏などが含まれる「その他肉用鶏^(注7)（ふ化後3カ月齢以上）」は、処理羽数が118万7000羽（同1.4%増）、処理重量が3464トン（同1.4%増）と、いずれも前年をわずかに上回った（図13）。

(注5) 調査対象は年間食鳥処理羽数30万羽超の食鳥処理場。
(注6) 食鳥処理場が肉用目的で処理した生体の重量。
(注7) ふ化後3カ月齢以上の鶏。地鶏や銘柄鶏が含まれる。

図11 肉用若鶏の食鳥処理重量および処理羽数の推移



資料：農林水産省「食鳥流通統計調査」

図12 廃鶏の食鳥処理重量および処理羽数の推移

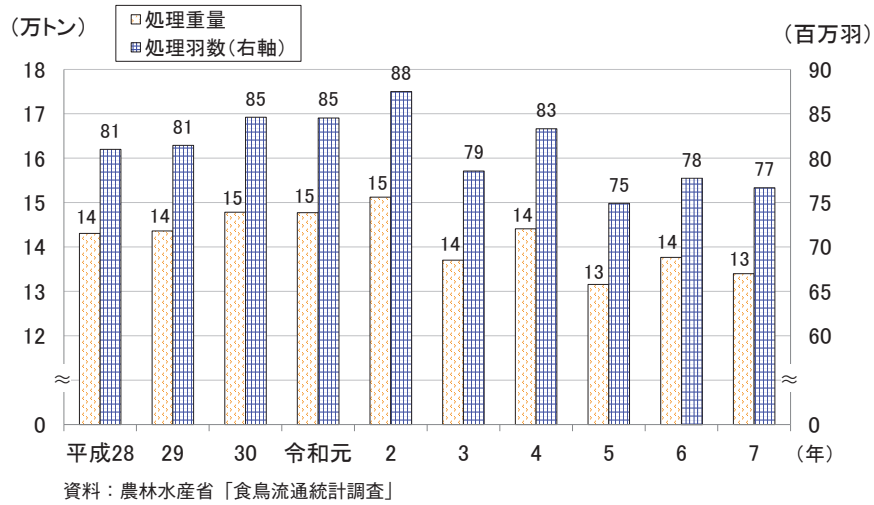
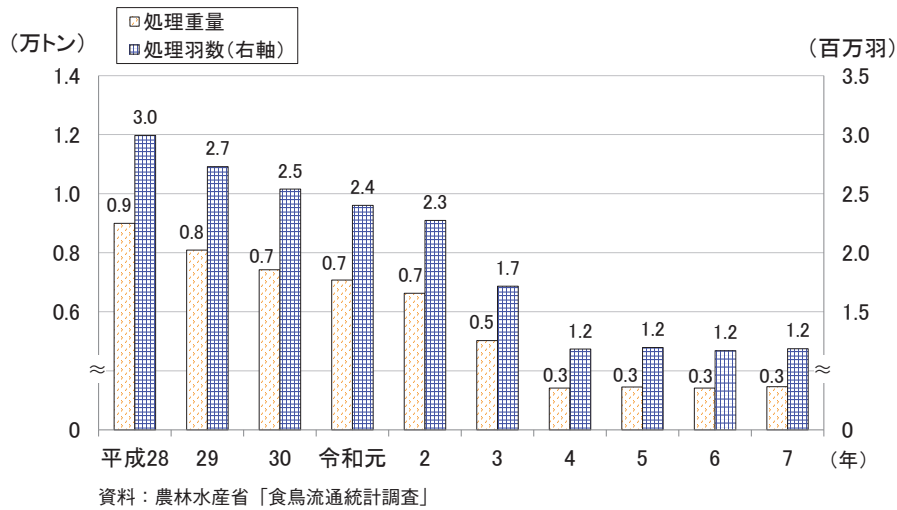


図13 その他の肉用鶏の食鳥処理重量および処理羽数の推移



(畜産振興部)